

# 発掘現場から⑱

## 茶畑六反田遺跡の調査から

### 平安時代から室町時代の遺跡の様子

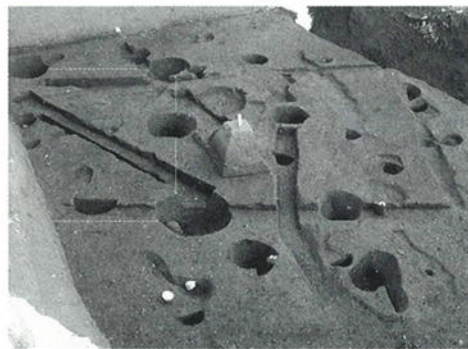
茶畑六反田遺跡では、縄文時代（約4000年前）から江戸時代（約150年前）にかけての人々の営みの痕跡がみつかりました。11月号で弥生時代中期（約2000年前）の様子を紹介しました。今回は平安時代から室町時代の様子について紹介します。

#### 平安時代の茶畑六反田遺跡

平安時代（約1000年前）の地層を調査した結果、大量の土器とともに4棟の掘立柱建物<sup>ほりたてたて</sup>がみつかりました。いずれの建物も今回調査した範囲の外側に延びており、建物の正確な規模はわかりません。しかし、9.5m以上×4.7mの大型の建物（掘立柱建物①）や、柱穴1つの大きさ<sup>おさび</sup>が約1.3×0.9m、深さ約1.1m



掘立柱建物①（桁行4間以上、梁行2間）



掘立柱建物②（桁行1間以上、梁行2間）

もある建物（掘立柱建物②）などの大型の建物が密集して建てていた可能性があり、遺跡周辺に有力者が住んでいたことを示唆しています。

これらの建物群のそばでは、灰釉陶器のお椀（杯）<sup>さき</sup>が出土しています。灰釉陶器は、植物灰を原料としたうわ薬<sup>うわぐすり</sup>をかけた陶器で、当時の貴重品でした。



灰釉陶器

茶畑六反田遺跡の有力者は、こうした貴重な器を入手することができるといえるのでした。

また、平成15年度調査では当時の水田もみつかっています。同じ遺跡内で居住地と耕作地の両方がみつかったことは、平安時代のくらしを復元するうえで、貴重な調査例となりました。

#### 鎌倉・室町時代の茶畑六反田遺跡

鎌倉時代（約800年前）は、農業を基盤とした生活が営まれていたようです。みつかった建物は小規模なものが大半ですが、中には柵で建物を囲った比較的大きなものもみられます（平成12・13年度調査）。小規模な建物は狭い範囲に密集して建てられています。大きな建物は点々と散在する傾向にあります。

建物の規模の違いは、集落内での財力の差を表していると思われる。

室町時代（約600年前）になると、居住地から耕作地へと土地の利用が変化します。室町時代の地層には、畝を作ったり、畠を耕した際にできた溝状の痕

跡が何条もみつかりました。耕作に利用されたと思われる水路の跡もみつかっています。このほか、平成15年度の調査では、室町時代の地層の土を分析した結果、イネ科やアブラナ科の植物の花粉を確認して、栽培されていた作物の様子を知ることができました。

このように、古代から中世には、居住地または耕作地として土地利用がされており、現代と変わらぬ田園風景が広がっていたことがわかりました。茶畑六反田遺跡の現地の発掘調査は11月で終了し、現在は調査した成果を報告書にまとめる作業を行っています。調査結果の整理中に新たな発見がみつければ、またご案内します。

鳥取県埋蔵文化財センター  
調査第二係（名和調査事務所）  
〒689-3205  
西伯郡大山町西坪字中松堀 179-5  
電話 0859-54-2671